Literaturanschauung des frühen Ogais

Masafumi SUZUKI

Mori Ogai (1862-1922) gilt als einer der Dichter sowie Literaturkritiker, die zum ersten Mal die deutsche Literatur in Japan importierten und die Grundlage für die moderne japanische Literatur schufen. Seine Einstellung zur europäischen Literatur war aber eigenartig im Vergleich zu seinen Zeitgenossen. Er kritisierte heftig den von Zola verfechteten "Naturalismus", der auf die damalige Welt der deutschen Literatur grossen Einfluss ausübte, und empfahl dafür leidenschaftlich die romantische und nationale Literatur wie die Schillers. In dieser Arbeit wird erstrebt, den Hintergrund von seiner eher "konservativen" Literaturanschauung zu betrachten. Ogai begann mit dem Deutschlernen im Alter von 10 Jahren, um bis 22, wo er nach Deutschland zum Medizinstudium ging, an einer Privatschule, einem Vorbereitungskurs und der Universität Deutsch intensiv weiterzulernen. Seine deutschen Sprachkenntnisse standen deshalb fast auf der höchsten Stufe, die damalige Japaner erreichen konnten. Aber diese hohe Sprachfähigkeit erlangte er nur für das Medizinstudium, das aus der totalen Übernahme der deutschen Medizin bestand, und er erfuhr während des Studiums in Japan kaum über die deutsche Kultur. Man könnte also sagen, dass Ogai mit dem Germanistikstudium erst nach der Ankunft in Deutschland angefangen hat. Bei seinem Aufenthalt in Deutschland las er wahllos hunderte Bücher, besonders deutsche wie europäische Klassiker, Romantiker, Daudet, P. Heyse, Hartmann und als Literaturhistoriker R.v.Gottschall. Er las wohl dabei eins nach dem anderen ausschließlich aus eigenem Interesse,

denn in seinen Leseaktivitäten beobachtet man kaum Tendenz. Und es ist auch nicht verwundernswert, dass er von den deutschen zeitgenössischen Dichtern, also den des Realismus — Keller, Meyer, Stifter, Fontane u.s.w. — fast gar nichts gelesen hatte. Es wäre deswegen leicht zu vermuten, dass weder Realismus noch Naturalismus dem literalischen Geschmack Ogais passte, und dass er als Folge davon den Weg vom deutschen Realismus zum Naturalismus eher ungenügend erleben konnte. Aus der ausführlichen Forschung über Ogais Bibliothek ergibt sich kein Hinweis, dass er Zolas "Le roman expérimental", an dem er scharfe Kritik übte, mindestens in der Übersetzung gelesen hatte. Die mangelnden Erlebnisse vom frühen Ogai über Realismus und Naturalismus könnten nämlich zur Abneigung gegen die damalige moderne deutsche Literatur und zum grossen Lob über die Romantik und den Vormärz führen. Diese Situation sollte später gemildert werden, indem er auch naturalistische Dichter wie Hauptmann oder Ibsen anerkannte.

初期鷗外のドイツ文学観

鈴木将史

明治維新以降の我が国は、産業技術同様精神科学面においてもヨーロッパを絶対的な模範として発展を遂げるわけだが、文学においてはその図式に微妙な相違が見られる。即ち、当時の文学者には、西欧文学を新たな文学の地平として遥かに仰ぎ見、自ら率先してその精神を学ぼうとした者も少なくはなかったが、反面旧来の文学を守り通そうとした者も存在したのである。そして、開化的な文学者たちにあっても、彼らが生まれ育った国文学・漢文学の下地からは容易に抜け出すことが叶わず、そうした背景から、和洋が奇妙に折衷した過渡的な産物が次々と生み出されることとなる。森鷗外も、そうした日本文学の過渡期的な時期に活躍し、最終的にはそのジレンマを克服した（或いは超越した）数少ない作家のうちの一人だが、小論では、青年期の鷗外とドイツ文学の関わりを俯瞰することにより、彼独特の西欧文学への入門態度を考察してゆきたい。

精神世界の推移が常に技術世界の進展に一歩遅れることは世の常であるが、鷗外が世に現れた時代（明治二二年・一八八九年以降）というのは、丁度西欧精神文化が近代日本にも根付き始めた時期に符号する。それまでの明治文学は、いわば黎明期ともいえるものである。当時は近世後期の作風を色濃く背負う戯作者めいた作家たちの集団（仮名垣派、柳亭派など）が、旧来の文学形式を主張し続けたと同時に、主に評論の分野で福沢諭吉、西周らが西欧思想を精力的に輸入した。即ち、動乱の明治維新期には文学も含めた芸術一般が、支援者を失ったせいで一時中断し

た形となり、明治期にその活動が再開されても、暫くは前時代の創作形式が継承されたわけである（全体、精神文化の伝播においては、思想と芸術を比較すると、思想がいち早く輸入され、芸術批評がその後を追い、やや遅れて芸術本体が本格的に輸入される傾向が一般的である）。勿論、鷗外以前の我が国には、いわゆる近代的「文壇」といったパブリックな文学界は形成されておらず、ましてや小説においても、詩においても、文芸評論においても語るに足る革新は殆ど為されていなかったというのが実態である。そしてこれらの分野のことごとくで、鷗外が新境地を切り拓いていったという事実を、我々は尊重しなければなるまい。（唯一戯曲においては、彼の功績は既に色褪せた感がある。ただ演劇に関しては、我が国にもほぼ完成した演劇形式が存在していた。従って、そもそも西欧演劇形式に我が国が馴染むまでには、詩歌・小説形式とは比較にならぬ時間と手間がかかり、その本格的な導入は約二十年遅れることになる。そして、その導入も鷗外の影響を抜きにしては語れない[一]。更に廻り合わせ次第では、我が国の演劇界に彼が決定的な影響をもたらしかねなかった可能性もあるのだが、その点については後に述べたい。）

世に二大文豪として鷗外・漱石の名が喧伝されてきたが、鷗外の十六年後にデビューした漱石の頃には、こうした文芸の各分野が、西欧文学の影響のもと着実に発展しつつあったわけであるから、鷗外と漱石の日本文学史上における位置づけは、次元を違える必要があろう。高橋義孝は、いみじくも「森鷗外とともに事実上何かが終わり、夏目漱石とともに事実上何かが始まった」[二]と主張するが、この指摘は鷗外以前の文学者に必須であった漢籍の素養、及びとりわけその文体に着目した時に有効な発言であると思われる。晩年の鷗外は、いうなれば「先祖がえり」的傾向を示したが、その中で万人が傑作と認める『澀江抽斎』や『北條霞亭』が世に出たわけであるから、彼が旧体質を多分に背負った文学者であったという主張も故なしとはしない（そして必然的に現代では漱石以上に閑却されようとしている）。ただ、明治二十年代の鷗外は、突然大量に受容したヨーロッパ文化への興奮が冷めやらず、正にカオスともいうべき我が国の文学界に道標を立てるべく、時には無用な軋轢さえ引き起こすほどに、様々な試行錯

誤を繰り広げるのである。従って、先に述べた如く、彼で「始まったもの」は確かに存在したのだが、その多くは後の彼が発表した別方向の巨大な作品群の中に埋没してしまったというのが実情ではないだろうか。一切の誓言をそぎ落とした鷗外晩年の歴史小説群に、彼自身の、感傷に溺れ饒舌に酔いしれた青年期を投影することなど至難の技である。外国文学に通暁した人間が生み出す作品として見るならば、彼の歴史小説はやはり驚嘆すべき産物といえよう。(同じくヨーロッパ文学に通じた漱石が晩年に著す極めてコスモポリタンな小説群とは、この点でも好対照を成そう。ただ、創作形式の推移からいえば、左から右へと針が振り切れるような鷗外文学の変遷には、一際興味深いものがある。)そうであるなら、青年期に親しんだ、否のぼせ上がったとさえいえるドイツ・ヨーロッパ文学と彼との関係を探ることにより、彼が始めようとしたものの実体が自ずと浮かび上がる筈である。

鷗外漁史森林太郎(一八六二―一九二二)の経歴をここで改めて列挙する必要は微塵もあるまい。代わって、彼とドイツ語・ドイツ文学との交わりを紹介しておく。津和野藩医の長男として生まれた鷗外は、幼少より漢文並びにオランダ語を学ぶが、十歳になると、いよいよ大学医学部入学の下準備としてドイツ語を学ぶために上京する。当時は官立高等教育機関の入学試験科目にはドイツ語もあったため、その予備校として、東京にはごく私的なものから学校然としたものまで三十程度のドイツ語塾が開設されていた。大規模な塾では寄宿制も採用され、ドイツ語のみならず、他言語(英・仏)やその他の科目(数学・漢学・地理・科学など)も教えられていたようである。[三] こうした塾で当時最大規模を誇った「進文学社」に鷗外は入学しドイツ語学習を開始したのである。それから一年と数カ月後に十二歳という若年で東京医学校予科に首尾よく合格し、その三年後に本科入学、更に四年後には医学部卒業、東京陸軍病院着任と、些かの時間的浪費もなく教育課程を駆け抜ける。大秀才鷗外の面目を最も施す時期がこの時であろう(その余りの早熟ぶりに予科入学基準年齢に足らず、彼は年を二歳偽って入学した)。当時の大学医学部での講義は、お雇い外国人(全員ドイツ人)によるドイツ語での講義が過半を占めていたため、進文学社入学

から大学卒業までの八年間余りの間、鷗外が日々ドイツ語と深く関わり続けていたことは明らかである。その結果、彼のドイツ語運用能力は非常に高い水準に達していたであろうことは想像にかたくない。事実、彼の残した独文は日本人が到達し得る殆ど最高のレベルにある。また、彼の会話能力を示す直接的な証拠はないが、軍医監石黒忠悳（ただのり）にその語学力を買われ、万国赤十字社同盟総会に陪席させられた事実や、地質学者ナウマンと繰り広げた日本人の未開性についての口頭での論争など、やはり当時の留学生でも稀なほどの語学力を有していたことに疑いはあるまい。[四]

ところが、鷗外とドイツ文学の交わりということになると、ドイツ語学習開始から遥かに遅れ、明治十七年（一八八四、鷗外二二歳）からのドイツ留学時代にようやく始まったと見るのが妥当である。なぜというに、それまでの我が国では、ドイツ語教育はなかなかの隆盛を見せていたものの、それは大学予備門をくぐるための手段に過ぎず、ドイツ文学・文化研究となると、端緒さえ開かれてはいなかったからである。帝国大学文科大学に独逸文学科が増設されるのは、ようやく明治二十年になってからのことであり、畢竟それ以前の我が国にはドイツ文学に関する文献は殆ど流入してこなかったと考えるべきだろう。鷗外が学んだドイツ語塾での一般的な教科書は、歴史書、地理書、窮理書、文典の類であり、文学を読んだという形跡は見られない。従って、ライプチヒに降り立った鷗外の前に、初めてドイツ・ヨーロッパ文学の全貌が姿を現し、彼はそれらの読破に勇躍として取り掛かったわけである。留学生活を綴る『独逸日記』にも、ベルリン到着から二週間ほど経た明治十七年十月二四日の日記は「夜は独逸詩人の集を渉猟することゝ定めぬ」[五]という結語で締め括られている。更に翌年八月十三日の段では、「架上の洋書は既に百七十余巻の多きに至る。鎖校以来、暫時閑暇なり。手に随いて繙閲す。其適言ふ可からず。盪胸決眦（とうきょうけっし）の文には希臘の大家ソフオクレエス、オイリピデエス、エスキユロスの伝奇あり。穠麗豊蔚（じょうれいほうううつ）の文には仏蘭西の名匠オオネエ、アレヰイ、グレヰルの情史あり。ダンテの神曲は幽昧にして恍惚、ギョエテの全集は宏壮にして偉大なり。

誰か来たりて余が楽を分つ者ぞ[六]（ルビ書き筆者）」とある。この文からは、ゲーテ、シラー全集を始めとして、独書が整然と並ぶ書架を前にしながら、一人悦に入っている林太郎青年の姿が目に浮かぶようである。彼は読了した本に対してその日付を書中に書き入れる習慣があったため、留学時代の読書活動が相当旺盛であった様子を窺うことができる。[七] 勿論、留学の目的はドイツ医学の修得にあったわけであるから、日々の業務を鷗外は誠実にこなしたが、帰宅後、或いは休日ともなると、しばしば読書に没頭したのである。

従って、ドイツ留学時代に鷗外は、オフィシャルには医学（衛生学）を、プライベートにはドイツ・ヨーロッパ文学を精力的に学んだわけである。こうした基本的スタンスは、結局生涯に渡って継続され、これも実は鷗外文学が持つひとつの特徴になるのだが、その詳細は改めて述べることとしたい。さて、鷗外がドイツ文学に開眼した留学時代は、またドイツ文学自体にとっても非常に微妙な時代であった。一八三二年に巨星ゲーテが没すると、ドイツ文学界全体が軽い虚脱状態に陥り、それから未だに脱しきれていない。ゲーテ時代後期に隆盛となったロマン主義では、ドイツがヨーロッパでの指導的役割を果たしたが、写実主義に移行すると、フランスやロシアの後塵を拝する状態となる。戯曲の世界では一八六三年に没したヘッベル以降、泰斗と呼びうる作家は見当たらなくなる。しかし、政治面から見れば一八七一年にドイツ帝国が建国され、民衆の気運は上昇の一途を辿っている。そしてそれに呼応するように、ドイツ文学は、鷗外の帰国直後から世紀転換期文学への一大変革期を迎えるのである。従って鷗外が滞在していたころのドイツ文学は、爆発へのエネルギーを溜め込んだ最終段階にあったといえよう。ところが、当時の鷗外はこうした周囲の動きには殆ど頓着せず、文学の王道たるゲーテ、シラーを始めとする西欧の名作に挑戦する傍ら、世紀転換期文学からは歯牙にもかけられないP・ハイゼの短編集などを好んで繙いていたらしい。[八] これはひと昔前の文学部に入りたての学生が行う読書行動に類似しており、鷗外の西欧文学体験はここから開始されることが了解されるかと思う。同様に「教科書」としてR・V・ゴットシャルの "Literarische Todtenklänge

und Lebensfragen〟を精読し、その理論に多大な影響を受け、そこからゾラ排斥、ドーデー称揚という彼の基本的文学的姿勢が打ち出されていくことは周知の事実である。その様子は、鷗外最初期の文学論文『小説論』に詳しい。そこでのゾラ排斥の実態は、その文学理論の否定であって、後に彼が坪内逍遥と繰り広げる（もしくは逍遥に挑みかかる）「没理想論争」の本質を窺うことができる。

ゾラの『実験小説論』（この文章を鷗外は「エッセイ」と断じ、論文とは決して認めようとはしない）[九]がクロード・ベルナールの『実験医学序説』に基づいていることは有名だが、文学理論がそもそも医学理論を援用することに、鷗外は強いアレルギーを示すのである。鷗外の最も早い文学論文と目されている『小説論』の中で、「余が醫にして小説論を艸するは此の如く（筆者注：以前に西洋の医学と日本の詩学を関連付けた小永井小船のこと）淺薄なる意匠に基くには非ざるなり」[一〇]とわざわざ断りを入れてから、彼は医学と文学の弁別を説明してゆくのだが、そこには自然科学的理論と芸術的理論何れにも当代随一と任じながら、両者を同次元で論じることを潔しとしない鷗外独自の矜持が垣間見える。ただ、槍玉に挙げられた『実験小説論』を、彼がどの程度理解していたかは、疑問の残る点である。鷗外は論文中において他論文の要約を得意とし、またその簡潔で当を得た要約には、しばしば感嘆を禁じ得ないが（彼は文芸作品においても要約を好み、百篇に余る戯曲梗概を残している。そのため鷗外博士ならぬ「梗概博士」と揶揄されることさえあった）、「実験小説論」の紹介は、簡略に過ぎた観がある。つまり、鷗外は「実験小説論」の要諦を、「小説は公衆の面前にて行ふ試験の記事なり。小説は分析的批評なり」[一一]、と解釈し、そこから「空想を廃し、事実のみを描写する文学」としてゾラ文学を糾弾するのである。しかし、実際の「実験小説論」は、それほど偏向した論旨ではない。鷗外の指摘した点に関すると、「実験小説家」は「事実」ではなく、「事実」が連鎖的に招来される「因果関係」を描くのであって、「事実」、即ち自然環境の初期設定は科学者における実験の設定同様、小説家に委ねられているのである。事実の連鎖から観察された因果関係こそ、「真理」であり、「決定性」であ

る（こうした「決定性」と、因果関係と無関係に事実が出現する「宿命性」とを、ゾラは明確に対峙させ、「宿命性」を実験小説から退けている）。従って実験小説家は「事実」ではなく「真理」の描写に努めなければならない、というのがゾラの論旨である。それを鷗外は少なからず極端に解釈し、「正史が文学だろうか、日刊新聞の雑報が文学だろうか」と非を咎めるが、そうした反応は、ドイツで自然主義が台頭した頃の守旧派文学者達の反応に共通した面がある。

「わたしたちは確かに、本当の事実を示すためには現象をつくりだして、これを誘導する必要がある。そこに作品におけるわたしたちの創造と才能の分野がある。だから、後に述べねばならぬ形式や文体にたよるまでもなく、実験的方法を小説に採用する場合は、自然から逸脱することなく自然を変化しなければならないのは自明のことである。」[一三]

鷗外はこうしたゾラの主張も知悉していたのだろうか。当時の彼の蔵書中には、ゾラの著作は見当たらない。

また、そもそも鷗外は自然主義の前段階である写実主義自体をさして好んで読まなかったふしが見られる。留学中に彼が蒐集した独書については詳細な調査が行われているが、そのリストを見渡してもドイツ写実主義作家の名は驚くほど少ない。書物には読了日と簡単な読後評が漢文で記されているが、夫々即妙の一文が光る中、珍しく通読したケラーの『村のロメオとユリア』については、「通篇日本戯曲を讀むが如し」といかにも素っ気ない。マイヤーやフォンターネといったドイツ写実主義の代表的作家に至っては、手に取った様子もないのである（彼が滞独中に購入した独文学関連文献は、レクラム文庫がその半数を占めるものの、総数四五〇冊を越える。ゲーテ、シラー、ハイネそしてドーデーについては殊更耽読した跡を窺わせるが、写実主義作家については、短編集に収録されたも

のを除いて、ケラー『村のロメオとユリア』とシュティフター『ブリギッタ』が見当たるだけである[一三]。更に、作品と平行して理論の学習のため、文学史も渉猟しているのがいかにも鷗外らしいが、ゴットシャルはまだしも他の著者に至っては殆ど現在にその名を残しておらず、その段ではやや偏向的な文学史を摂取していた可能性が高い[一四]。現代でも定評のあるシェーラーやブランデスの文学史に触れたのは後世であるらしい[一五]。従って、ロマン主義から写実主義を経て自然主義へと一種必然的に至るドイツ文学の流れを帰国直後の鷗外は十分に把握していなかった可能性がある。彼の批判はドイツにおいてホルツ・シュラーフが開始したとされる「徹底自然主義」に、よりふさわしいものであり、当然のように、「事実」のみを列記する「徹底自然主義」は長続きしなかった。だが他の自然主義作家たちは、創作の源泉となる「詩想」を何にも増して重視していたのである[一六]。

鷗外の、ゾラの言葉尻を捕らえたとまで思われるこうした論法は、逍遥との「没理想論争」でも顔を見せるわけだが、犀利な分析にかけては人一倍の自負を持ち、ひとたび論争となれば決して後には引かなかった彼も、その感性においては非常な柔軟さを有していた。ゾラの理論を(自分なりに)徹底的に論破しながらも、その作品群の魅力を否定しない点などは、典型的な例である(その魅力は実験小説理論によるものではないことを断ってはいるが[一七])。特に、自然主義劇作家の二大巨頭とも形容しうるイプセンとハウプトマンを共に評価し、解説を執筆している点などは、彼の文学的感性の奥行きを物語るものだろう(イプセンもハウプトマンも、生来の創作者であり、文学論めいた文章を残していないことも幸いしたやもしれない)。従って彼は理論的には「反自然主義」(実際のところは「反徹底自然主義」)を標榜していたが、作品そのものに関しては、自然主義的な作品も十分評価していたといえる。鷗外自身、後期に生み出した歴史小説群は、強固な社会的枠組みの中で苦闘しながらも結局その枠組みを崩すことのできない人物たちを描いた意味で西欧自然主義的であり、特に封建制という軛(くびき)の前に滅び去る一族を描く「阿部一族」などには、ハウプトマンの「フロリアン・ガイヤー」や「アトレウス四部作」と共通した抜きがたいデテルミ

ニスムが通底していよう。さてそこで、自然主義を理論的には斬って捨てる反面、帰国直後の鷗外はいかなる文学を推挙していたのかというと、その点について非常に示唆に富む文章が残されている。それは、〝Über eine neue Richtung der japanischen Literatur〟（「日本文学の新たなる方向」）と題した独文論文である。[八] この論文の概要を纏めると、以下の通りである。

政治が恣意的に無用な介入をすると、文学に支障をきたすことは確かだが、我が国では来るべき政治的新体制への期待が様々な文学を生み出している。坪内逍遥は『小説真髄』により旧来の文学を排斥し、文学者に課せられた使命を初めて明確にした。また彼の作品は明らかにヨーロッパ文学を範に取ったものである。また、逍遥とは別方向に進む作家が山田美妙である。彼は日本史から題材を取りながら、他には見られぬ口語文体を用い、人物像の立体的な造形を長所とする。彼にはその斬新性故に様々な非難が浴びせられたが、その独創的な文体の功績は疑いがない。我が国の文学における「うた」や「和歌」や「詩」の語法は、例えばドイツにおける「ニーベルンゲンの歌」や韻律詩のようなもので、古代日本語の形骸に他ならない。そのため我が国の文学は、シラーの如き大衆的人気を博することが出来なかったのである。「国民文学」を有しない民族の精神は衰退せざるを得ないのだ。京伝や馬琴の文学は、民族の精神とある程度結び付いていたかもしれないが、それらは余りに知性を頼みとし過ぎており、素朴な民族精神には理解し難いものだった。その代わり、小唄などの通俗的な文学も現れたのだが、ブレンターノが保護する程の価値もない代物である。近代ジャーナリズムが成立し、読売新聞により初めて現代日本語が文学的に使用し得ることが示されたわけだが、その優雅さの欠如が、読者をして馬琴の亜流という誤った革新的方法へと向かわしめた。こうした空白状態から新たな日本文学が生まれでてこなければならないが、それは読売新聞の大衆的スタイルと、芸術的に完成した形式が結び付いたものである。そして今、山田美妙がその方向に進んだのである。山

田美妙が日本古来の精神と西欧文学の持つ様式美を見事に結合することにより、日本が現在置かれた疾風怒濤時代から真の国民文学を打ち立てるならば、国民全体の本質を表現する創造者という詩人最高の栄誉を彼は担うことになるであろう。[一九]

この論文は、鷗外が帰国してから半年後に書かれたもので、思想的な深みを見せているわけではないが、ヨーロッパ文学を知った鷗外の日本文学に関する第一印象という意味で、彼の文学的直感を探るには好適の文章であろう。二年後に執拗な論戦を仕掛ける逍遥の功績を認めているのも目を引くが、「ニーベルンゲンの歌」やシラーやブレンターノという文言にいかにも洋行帰りというバタ臭さが漂っている。更に「国民文学」や「疾風怒濤時代」という（ドイツ本国にとっても大時代な）用語が登場するところを見れば、彼の文学的理想郷は、ドイツ・ロマン主義或いは三月前期時代に置かれていたことが推察される。対して、鷗外当時のドイツ文学の状況は、余り参考にはされていないことが窺えよう。（それに関連して少し疑問に思われるのは、鷗外が「国民文学」（"Nationalliteratur"）という単語を極めてポジティブに利用している点である。何故なら「国民文学」という概念は、すでにゲーテにより人類普遍の文学を目指す「世界文学」（"Weltliteratur"）という概念に克服されており、当時のドイツでも対ナポレオン開放戦争をイメージさせる文学的アナクロニズムの響きを多分に有していたからである。鷗外はそれを知った上で、日本の精神状況をドイツから百年遅れたものとして敢えてこの用語を用いたのだろうか、それとも、写実主義から自然主義へと至るヨーロッパ文学の流れについての認識が当時の鷗外にはまだ希薄であった故に、この語が用いられたのであろうか。）

そして、日本文学の行く末を担う最もふさわしい人物として、鷗外が美妙山田武太郎の名を明言した事実は、当時の鷗外の文学観を端的に示す例といえよう。この論文が書かれた年の新年に、美妙は「胡蝶」を世に問い、前々

年の「武蔵野」と相俟って、その言文一致体と斬新な作品構成を武器に、二一歳という若さで華々しい筆名を勝ち得ようとしていた。確かに彼の作品は、日本史から取った題材を口語文で描写することにより、「大衆的スタイルと芸術的に完成した形式が結び付きつつある」かのごとき印象を与え、来るべき文学に「国民的アイデンティティー」と「国民的大衆性」及び「優雅さ」を要求した鷗外にとって美妙が最も嘱望すべき作家であったことも頷けよう。また、「胡蝶」に限っていえば、この作品は非常に注目すべき文体を有している。即ち、地の文は当時の口語体でも他に類を見ない「です・ます」体を使用しているのに対し、作中の会話文は純然たる文語体となっているのである。逆の例は、紅葉の「金色夜叉」や蘆花の「不如帰」に代表されるように、以降の口語体小説には普通に見られるようになるが、「胡蝶」のスタイルは語り手の主体性と自由度をより強調する点において、ドイツ文学における「一人称小説」（〝Ich-Roman〟）や「書簡体・日記体小説」、そして「枠物語」に通じる要素を有している（「胡蝶」の前後には作者による口上が付けられている）。論文を発表した二カ月後、鷗外はアーヴィングの「リップ・ヴァン・ヴィンクル」を翻訳した「新浦島」において「胡蝶」の地の文体を模倣しているが、この文体が鷗外の激賞を呼ぶ一因となったであろうことには疑いがない。だがその文章自体は、浪漫的を過ぎて余りに主観に走っており（作者の感想や講釈が時折混じる）、纏わりつくような粘着性を有した一種独特のもので、口語というより講談・浪曲の類に似つかわしいスタイルである。やはり過渡期に生み出された文章の感は否めない。この美妙が、写実を旨としゾラを手本に取っていたというのは少々意外な思いもするが、それを後で知った鷗外も同感であったのだろう。後に美妙が著した「日本韻文論」を評して、鷗外は「美妙齋主人が韻文論」を書き、その中では「日本文学の新たなる方向」での手放しの誉めようとはうらはらに、美妙の論旨の悉くに留保が付けられている。「憾む」という言葉がしばしば用いられているところに、鷗外の無念さを窺い知ることができよう。[二〇] 総じて初期の鷗外は、当時の文学界を挑発せんばかりに、その辛辣無比の舌鋒を誰彼構わず向けていたため、彼に称揚された国内の文学者などごく僅かに過ぎ

ない（この他に、文学者個人をまがりなりにも正面きって賞賛した鷗外の文章というのは、二十年後に二葉亭四迷の追悼文を物した程度だろうか）。そして、その筆頭であった美妙の文学について評した文章が「日本文学の新たなる方向」と銘打った三頁程の小論文のみというのは、正に筆者の「憾み」とするところである。美妙を絶賛した理由が彼により詳述されていれば、初期鷗外の文学観は、後世により明確な姿を残したことであろう。美妙が以降不振に陥ることにより、鷗外の目利き違いが立証される形となったが、帰国後も、忙中にありながら彼は独文学研究の研鑽を怠らなかった。特に、留学時代には読むことが叶わなかったハウプトマン文学に触れ（この詩人は、鷗外と同年齢である）、彼の作品の遍くを読み、あまつさえ解説書にも親しむことによって、同時代文学の諸相を確実に把捉していった様子が窺える。明治三六年には客観に徹したハウプトマン評伝を著し、ドイツ近代文学においても鷗外はその着実な見識を実証するのである。結局、彼が書いた正式な評伝はゲーテとハウプトマンのみである。評伝において鷗外は、ハウプトマンが文壇にデビューした際の余りにも有名な自由劇場主催「日の出前」初演スキャンダルを、あたかも身をもって体験したかのように伝えているが、それは明治二二年のことであり、彼がもう一年ベルリンに留まっていさえすれば、実際にこの騒動を目の当たりにすることが出来た筈である。そうして見ると、日独近代文学を代表する両者は、ベルリンにおいて、ものの見事にすれ違ったのである。鷗外はドイツの新聞を購読していたため、海外の騒ぎをリアルタイムに察知することは可能だったろうが、[二]「日の出前」初演の熱気と興奮を肌で感じることが出来たなら、同時代文学への見方も相応に変わったものとなったことだろう。ひいては我が国の自然主義を輸入する速度も早まったものと思われる。独仏の近代写実主義演劇運動を手本として、小山内薫と市川左団次が「自由劇場」を旗揚げするのは、ドイツから遅れること丁度二十年の明治四二年であった。

註

一　日夏耿之、『鷗外文学』、日本図書センター　平成二年、一九九―二二二頁参照。

二　高橋義孝、『森鷗外』、厚文社　昭和四〇年、七頁。

三　宮永孝、『日独文化人交流史』、三修社　平成五年、三一三―三三八頁参照。

四　鷗外と同年にドイツに留学し、鷗外に初めて『ファウスト』翻訳を勧めた巽軒（そんけん）井上哲次郎（後の東大文学部哲学科教授）は、「自分も独逸に行く迄は、多少独逸語の稽古をして居ったけれども、なかゝ独逸語は未熟で、独逸書を読むことは出来なかった」と告白していた。上掲書、三一〇頁。

五　森鷗外、「独逸日記」、『鷗外全集』第三五巻、岩波書店　平成元年、九〇頁。（以降の鷗外作品は、全て本全集より引用）

六　同書、三八頁。因みに、「独逸日記」は草稿が消失しているが、元来漢文で記されたとする見解が一般的である。引用文中の晦渋極まりない熟語もそれを物語るものであろう。

七　一晩に短編七編を読了するという「離れ業」をやってのけたという報告もある。小堀桂一郎、「森鷗外とゲーテの『ファウスト』」（『ゲーテ年鑑』第十二巻、日本ゲーテ協会、一八九―二一五頁）参照。

八　小堀桂一郎、『若き日の森鷗外』、東京大学出版会　昭和四八年、三二頁参照。

九　森鷗外、「エミル・ゾラが没理想」、第二三巻、八五頁参照。

一〇　森鷗外、「小説論」、第三八巻、四五一頁。初出は明治二二年一月三日の『読売新聞』。後、大幅に修訂され「醫學の説より出でたる小説論」として同二五年一月二五日発行の『柵草紙』に掲載された。

一一　森鷗外、「醫學の説より出でたる小説論」、第二二巻、一頁。

一二　エミール・ゾラ、「実験小説論」、古賀照一訳、新潮社　昭和四五年、（新潮世界文学、七九六頁）。

一三　寺内ちよ、「ドイツ時代の鷗外の読書調査」（『比較文学研究』六、東大比較文学研究会　昭和三二年、一〇六―一三七頁）参照。

一四　Johannes Scherr, Adolf Stahl などといった文芸史家の著書も蔵しているが、これらの研究者たちは、「三月前期（Vormärz）」の文芸思潮を色濃く背負っている。同書。

一五　この二大文芸評論家の文学史について鷗外は、小倉時代以降に書いた小文中で推薦している。森鷗外、「近世の獨逸文学」、第二六巻、三四頁参照。

一六　自然主義の理論的指導者W・ベルシェと、J・ハルトは、それぞれ「ファンタジー」及び「ポエジー」という用語を用い、詩想の重要性を説いている。拙論、「ドイツ世紀末ボヘミアンとその文学運動―Jugendstil, Heimatkunst との関連を巡って―」、（『ノルデン』第二五号、ノルデン刊行会　昭和六三年、一五―四五頁）二八頁参照。

一七　鷗外は「醫學の説より出でたる小説論」において、ゾラ理論に反駁した後、こう述べる「されど世の人はこれ（筆者注：ルゴン・マッカール叢書）を厭はず。其故は奈何。かの鏡前に嬌態を弄する赤条々の淫女ナゝが活膚は解剖卓上の冷肉におなじからざればなり。」森鷗外、「醫學の説より出でたる小説論」、第二二巻、二頁。

一八　この論文は、「獨逸文雑誌會」から刊行された〝Von West nach Ost〟という独文雑誌に収録されているが、雑誌の所在が長らく不明となっており、論文も「鷗外全集」に収録漏れとなっていた「幻の論文」である。平成七年にその一号から三号まで再び発見された際には、耳目を大いに引いた。朝日新聞平成七年九月二十日夕刊記事、「鷗外〝幻の論文〟を発掘」参照。この論文については、小堀桂一郎氏の全訳と分析が後に出されている。　小堀桂一郎、「獨文『日本文学の新趨勢』について」（『森鷗外研究』、岩波書店　平成十年、一〇三頁―一

三三頁)参照。尚、雑誌そのものの解説については、以下の論文に詳しい。井戸田総一郎、「『幻』の雑誌 "Von West nach Ost" について」(『ドイツ研究』二一、成文堂 平成七年、一〇七―一一二頁)。

一九　Rintaro Mori: Uber eine neue Richtung der japanischen Litteratur, in: Von West nach Ost (3), Tokyo 3. 1889, S.23-25.

二〇　森鷗外、「美妙齋主人が韻文論」、第二三巻、九〇―一〇五頁参照。

二一　鷗外は、友人の青山胤通(帝大医科大学教授)と共に夫々ドイツ日刊紙を購読し(鷗外 "Berliner Tageblatt"、青山 "Kölnische Zeitung")、双方が読み終えた後に交換していた。森鷗外、「故青山男爵に關する話の聞き書」、第三八巻、二九六頁参照。